

筑波大学 CEGLOC 日本語教育セクション主催 第10回「未来志向の日本語教育」シンポジウム



開催日時

2025 年 8 月 1 日（金）14:00~17:20（JST）

@オンライン開催（ZOOM）

趣旨

2019 年 2 月にシリーズとしてスタートした本シンポジウムは、21 世紀の刻々と変化する状況の中で日本語教育をどのように構想することができるのかを大きなテーマとし、幅広い分野の研究者に発表および意見交換の場を提供します。本シンポジウムの発表テーマは教員養成や学習者のスキル、現場での日本語に関する調査報告など、未来の日本語教育の発展を期待できる内容となっています。

プログラム

詳細は 2 ページをご参照ください。発表要旨は 3 ページよりご覧ください。

アクセス

本シンポジウムはオンライン(Zoom)で開催されます。参加登録の締め切りは**2025 年 7 月 27 日（日）（23:59 JST）**です。参加は無料です。参加登録をされた方には、2025 年 7 月 31 日までにミーティングのアクセスリンクを送信します。リンクが届かない場合は岩崎 拓也 <iwasaki.takuya.gp[at]u.tsukuba.ac.jp>にご連絡ください。

第 10 回「未来志向の日本語教育」
シンポジウム 参加登録



アンチハラスメントポリシーについて

本シンポジウムは筑波大学 CEGLOC「未来志向の日本語教育」シンポジウムアンチハラスメントポリシーに従って開催します。
詳細は右 QR コードからご確認ください。



プログラム

- 3つのラウンジを設けています。議論を続けたい方など、ご自由にお使いください。
- 必ず Zoom の最新バージョンをインストールのうえ、ご参加ください。

13:45~	開場（Zoom からアクセスしてください）	
14:00~14:10	開会の挨拶：小野 正樹（筑波大学 教授／グローバルコミュニケーション教育センター長）	
	ブレイクアウトルーム 1 司会：岩崎 拓也（筑波大学）	ブレイクアウトルーム 2 司会：鏡 耀子（筑波大学）
14:10~14:40	ライトニングトーク L1) 宋 泊霖（文教大学大学院生） 中国人初級日本語学習者における テレビ番組が終助詞の習得と使用に及ぼす影響 ―「ね」を中心に― L2) 張 加一（筑波大学大学院生） 日本語教育・日本語学の学会誌における括弧の使用実態 L3) 呉 金澤（筑波大学大学院生） SNS から学ぶ日本語 ―20 代芸能人の Instagram 投稿における記号使用の分析― L4) マリーナ バハー・ハビーブ（東京外国語大学大学院生） エジプトの日本語教育における異文化間教育の導入 ―国立アインシャムス大学を事例として―	口頭発表 1 P1) 國頭 あさひ（国際交流基金メキシコ日本文化センター） 「いそどり日本語オンラインコース」を使った 教師のための日本語コース ―学習者体験で教材の活用方法を学ぶ試み―
14:40~15:10	口頭発表 2 P2) 龔 雪（麗澤大学大学院修了生） ピア・レスポンスにおける読み手の作文読解過程と話し合いとの関係 ―取り上げられなかったコメントの検討を通して―	口頭発表 3 P3) 加藤 由紀子（筑波大学大学院生） インバウンド強化を視野に入れた 日本語学習支援ポータルの可能性 ―「日本語ひろば」のアクセス解析を通して―
	15:10~ 15:20 休憩（10 分）	
	ブレイクアウトルーム 1 司会：日高 晋介（筑波大学）	ブレイクアウトルーム 2 司会：文 昶允（筑波大学）
15:20~15:50	口頭発表 4 P4) 松尾 恵理沙（東京国際大学、筑波大学大学院生） 日本語学習を継続することの意味 ―ロシア語母語話者の自律的な学習事例から―	口頭発表 5 P5) 奥野 紗衣・岩村 万里（立命館大学） 中級レベルの日本語ライティング授業における グループ協働作文の実践
15:50~16:20	口頭発表 6 P6) 稗田 奈津江（筑波大学） 勧誘談話の「相談部」におけるポライトネス効果とその要因	口頭発表 7 P7) Nguyen HongNgoc（東京都立大学大学院生） 教育市場化の中で揺れる大学日本語教師の 道徳的アイデンティティの成り立ち ―ナラティブ・インクワイアリーと三層文脈分析による考察―
16:20~16:50	口頭発表 8 P8) CAI YAOYAO（筑波大学大学院生） 日中接触場面における意見交換の発話末の語用的特徴	口頭発表 9 P9) DO BICHNGOC（九州大学） 初来日のベトナム人日本語学習者の 聞き返し使用に影響を与える要因について
16:50~16:55	総括：岩崎 拓也（シンポジウム実行委員長、筑波大学 人文社会系 助教）	
16:55~17:20	オンライン懇親会	

発表要旨（ライトニングトーク）

L1) 宋 泊霖(ソウ ハクリン)：文教大学大学院生

中国人初級日本語学習者におけるテレビ番組が終助詞の習得と使用に及ぼす影響 —「ね」を中心に—

日本語の日常コミュニケーションにおいて、終助詞の役割は非常に重要である。学習者にとって、より自然で円滑な会話を行うためには、終助詞の習得が不可欠である。しかし、初級学習者はその使い方を十分に理解できないことから、終助詞全体の使用を避ける傾向にあるという結果も報告されている。従って、リサーチクエスションはテレビ番組の視聴が、初級学習者の終助詞「ね」の使用判断にどのような影響を与えるかと設定する。本研究では、終助詞使用妥当性判断アンケート調査を通じて、テレビ番組が終助詞の習得にどの程度効果的であるかを検証し、学習者が効果的に終助詞を運用できる方法を開発するための示唆を得たいと考える。また、動画が初級学習者の会話習得でどのような役割をつとめているかを検討する。

L2) 張 加一(チョウ カイチ)：筑波大学大学院生

日本語教育・日本語学の学会誌における括弧の使用実態

本研究は、日本語の学術論文における括弧の使用実態を明らかにし、学術論文への応用を目指すものである。括弧は、引用や情報の補足など多様な機能を果たしており、論理性が求められる学術論文においても重要な役割を担っている。一方で、その使用にはジャンルごとの違いがあると考えられるため、各使用傾向を明らかにする必要があると考えられる。本発表では、18 種類の括弧を紹介し、日本語教育・日本語学の学会誌に掲載された論文を対象に、分野別に使用頻度の高い括弧上位 5 種類を共有する。その結果から、今後、日本語学習者に対して「アカデミック・ライティングの場面においてどの括弧が使われるのか」を明示的に説明できるガイドラインの開発が必要であることを示唆する。本研究は、論理的かつ適切な学術論文の執筆を支援し、未来志向の日本語教育に貢献するものである。

L3) 呉 金澤(ゴ キンタク)：筑波大学大学院生

SNS から学ぶ日本語 —20 代芸能人の Instagram 投稿における記号使用の分析—

現代の日本語教育においては、学習者の多様な興味や学習動機に応じた視点が求められている。とりわけ、SNS や芸能文化への関心をきっかけに日本語を学び始める若年層の存在は無視できない。本発表では、20 代後半の芸能人による Instagram 投稿を対象に、日本語の記号使用の実態を明らかにする研究を紹介する。現在、投稿文を収集・分類し、絵文字をはじめとする記号の用法や頻度を分析可能なデータベースを構築中である。これまで記号に関する研究は、新聞記事や作文などの書き言葉に焦点を当てたものが多く、SNS などインターネット上の使用実態に注目した研究は限定的である。本研究を通じて、こうしたメディア言語の一端としての記号使用を量的かつ質的に分析し、日本語教育における SNS リテラシーや異文化理解の促進、さらにハイブリッドの教育内容設計への示唆を提供したいと考えている。

L4) マリーナ バハー・ハビーブ：東京外国語大学大学院生

エジプトの日本語教育における異文化間教育の導入 —国立アインシャムス大学を事例として—

本研究では、異文化間教育の観点から、エジプトの高等教育機関における日本語教育の現状と課題を整理・分析する。現在、エジプト人日本語学習者（大学生・卒業生）を対象としたアンケート調査と日本人アラビア語学習者やエジプト人との業務上の関わりを持つ日本人ビジネスパーソンを対象としたアンケート調査をそれぞれ準備中である。その調査を通じて、エジプト人と日本人間のコミュニケーションにおいて生じたミスコミュニケーションの事例やその背景要因を明らかにすることを第一の目的である。例えば、「曖昧な表現の解釈の違い」「コミュニケーションスタイルの違い」「文化的価値観の違い」などによるミスコミュニケーション事例が見込まれる。両調査の結果を基に、DIE メソッド、ロールプレイ、ケーススタディなどを活用した教育プログラムをアインシャムス大学で設計・実施し、その教育効果を評価し、将来的な改善策を提案することを目的としている。

発表要旨（口頭発表）

P1) 國頭 あさひ(クニトウ アサヒ)：国際交流基金メキシコ日本文化センター

「いそどろ日本語オンラインコース」をを使った教師のための日本語コースー学習者体験で教材の活用方法を学ぶ試みー

本発表は、国際交流基金メキシコ日本文化センターが実施した、日本語教師を対象としたオンライン日本語コースに関する報告である。本コースでは、教師が学習者の立場で学ぶことにより、使用教材の理解を深め、自身の教授法を振り返って改善する力を養うことを目的の一つとしている。2024 年度のメキシコ・中米カリブ地域における教師研修事業では、「いそどろ日本語オンラインコース」を主教材としたコースを企画・実施し、11 か国から 37 名の教師が受講した。受講者は、各課の自学自習後にオンライン授業でアウトプットを行い、気づきをレポートにまとめるプロセスを繰り返した。講師は教材の説明を最小限にとどめ、各回の授業で異なる教材活用例を実演し、その有効性について受講生に問いかけた。受講生のレポートをもとに、コースの具体的な実施内容を整理し、教材活用や教授法の改善に関して得られた学びを考察する。

P2) 龔 雪(キョウ セツ)：麗澤大学大学院修了生

ピア・レスポンスにおける読み手の作文読解過程と話し合いとの関係ー取り上げられなかったコメントの検討を通してー

これまでのピア・レスポンス（PR）の研究では、話し合いの内容が第 2 作文への反映に焦点を当てたものが多かった。一方、話し合いに先立つ読み手個人の作文読解過程と、その後の話し合いとの関係も重要だが、この側面に注目した研究はない。本研究では、まず読み手が個別に作文を読解する段階で生じた思考を明らかにした。その上で、それらが使用言語（日・中）や作文課題の難易度（平易・複雑）の異なる条件で行う PR の話し合いに、どの程度反映されるかを検証した。具体的には、思考発話法を用いて、読み手が作文を理解中に浮かんだ思考を可視化し、それが実際の話し合いでどう扱われるかを調べた。また、話し合いで取り上げられなかった考えは、インタビューで理由を確認した。その結果、考えが共有されなかった背景には、日本語力の不足に加え、読み手が状況や文脈を踏まえ、書き手への配慮や失敗回避のため発言を意識的に選んでいたことが明らかになった。

P3) 加藤 由紀子(カトウ ユキコ)：筑波大学大学院生

インバウンド強化を視野に入れた日本語学習支援ポータルの可能性ー「日本語ひろば」のアクセス解析を通してー

「日本語ひろば」は、日本発のオンライン国際教育プラットフォームである JV-Campus の日本語学習支援サブポータルである。国内外の日本語学習者と日本語教師への情報提供を目的に、2024 年 10 月に公開された。本研究では、国内外の日本語学習者が本ポータルに何を期待しているかを明らかにするため、Google アナリティクスのデータを用いてコンテンツ別表示回数やユーザー行動を分析した。その結果、日英版両サイトで「日本語レベルチェック」のページ表示回数が最も多く、次いで「探す、学ぶ。」「聞く。」「知る。」などへの関心が高いことが示された。さらに、英語版では「進む、働く、受ける。」のアクティブユーザーあたりのビュー数と平均エンゲージメント時間が日本語版を上回る結果となった。これにより、英語版ユーザーは進学や就職関連の情報ニーズが高い傾向にあり、今後のインバウンド強化につながる可能性が示唆された。

P4) 松尾 恵理沙(マツオ エリサ)：東京国際大学、筑波大学大学院生

日本語学習を継続することの意味ーロシア語母語話者の自律的な学習事例からー

本研究では、ロシア語母語話者（C）の日本語学習に関する語りから、どのような学習環境（教室環境・自然環境）を経て日本語を学び、今なお日本語と関わり続けているのかについてライフストーリーインタビューを通して明らかにする。C は 30 代の日本語上級学習者で、大学で第二外国語として日本語の学習を開始し、日本留学や母国での対日ビジネスへの従事を経て、現在はオンライン日本語教師をしている。C の語りから、教室環境（第二外国語としての日本語授業）のみならず、様々な学習環境（第一外国語としての日本語授業、他大学の日本人教師による個別指導）に参画していたことがわかった。C は教師として今も日本語に関わり続ける意味を「日本語力の維持」としており、日本語力向上に対する思いが自律的で継続的な学習に繋がっていることが窺える。C の語りを自律学習促進の手がかりとして日本語学習に対する目的意識や学習の習慣化の重要性を提示する。

P5) 奥野 紗衣(オクノ サエ)・岩村万里(イワムラ マリ)：立命館大学

中級レベルの日本語ライティング授業におけるグループ協働作文の実践

筆者らが担当する中韓の留学生を対象とした中級レベルのライティング授業でピア・レスポンス活動を行っていたが、活発なやりとりが難しいことがあった。そこで、「グループで1つの作文を書く」という協働作文の活動を試みた。この活動では、作文のアイデアを出す段階からグループで行い、各自で分担して書いた初稿をもとに、グループで推敲を重ね1つの作文を完成させた。完成した作文をピア・レスポンスの推敲過程を分析した広瀬（2000）の分類分けを使用し、「Surface Changes」と「Text-Based Changes」に分けてみると、広瀬（2000）の結果と類似した結果がみられた。学習者の様子では、以前と比べて活発なやりとりが観察できた。また、個々の作文において推敲過程でどのような変化が見られたか分析をした結果、複文や文末表現において多く書き換えられる傾向が見られた。以上のことから、この協働作文活動が、学習者自身の推敲能力の向上の一助になるのではないだろうか。

P6) 稗田 奈津江(ヒエダ ナツエ)：筑波大学

勧誘談話の「相談部」におけるポライトネス効果とその要因

本発表は、勧誘談話の「相談部」におけるポライトネス効果とその要因を明らかにすることを目的とする。本研究では、LINE のテキストチャットを用いたロールプレイを実施し、日本人女子学生同士の談話データを収集した。その後、事後アンケートにより、不快感や違和感が生じたところを確認した。調査の結果、相談内容が一方的に決められたと感じた場合や、相談内容がスムーズに決まらなかったと感じた場合に、マイナス効果が生じることがわかった。その要因としては、緩和表現の不使用、[提案－同意]の連続使用、[課題提示]の多用が挙げられることが明らかになった。また、[不同意]の表明に関するマイナス効果はなかった一方、「消極的同意」にはマイナス効果が現れる場合もあることがわかった。これにより、ポライトネス効果の観点からは、相手の意向に反する[不同意]が必ずしも[同意]よりも優先的な返答であるとは言えないことが示唆された。

P7) Nguyen HongNgoc(グエン ホン ゴック)：東京都立大学大学院生

**教育市場化の中で揺れる大学日本語教師の道徳的アイデンティティの成り立ち
ーナラティブ・インクワイアリーと三層文脈分析による考察ー**

ベトナムの大学における日本語教育は、市場化と制度改革の影響を受け、伝統的な教育観と新たな制度的価値の間で揺れている。本研究は、そうした文脈で教師の道徳的アイデンティティの語りと構築を明らかにする。ナラティブ・インクワイアリーに基づき、2022年から2024年にかけて収集した大学教師4名の語りを対象とし、Barkhuizen（2016, 2017）の三層文脈分析を援用し、教師の語りを、個人の思考と感情（story）、組織との関係性（Story）、および社会構造や教育政策の影響（STORY）の各層から読み解いた。さらに、Phan Ngoc や Dương Thiệu Tống の思想に基づくベトナムの道徳的枠組みを理論的背景とした。分析では、教師たちが「母親」、「機械のように教える人(thợ dạy)」、「友人」として自己を位置づける言説を通し、伝統的な教育価値を志向しながらも、市場化された制度の中で新たな役割を引き受けざるを得ない状況を考察する。これにより、「道徳性を伴う教師アイデンティティ」の構築過程に光を当てる。

P8) CAI YAOYAO(サイ ヨウヨウ)：筑波大学大学院生

日中接触場面における意見交換の発話末の語用的特徴

本研究は、日中接触場面における意見交換に注目し、CNS と JNS が意見を表明する際の発話末の言語形式の使用実態を分析するとともに、インタビューを通じて、発話時に話者がどのような発話意識を持っていたのかを質的に分析するものである。従来の研究は、主にロールプレイを用いて会話データを収集してきたが、本研究はより自然な会話データを得るために、協力者同士に自身の学術的な文章について相互にコメントし合う形で意見交換を行ってもらった。分析の結果、終助詞の使用、「ん」や「と思う」の使用実態などにおいて、CNS と JNS の間に違いが見られた。また、文脈によっては、CNS が言い切りの形で意見を表明しても、JNS には違和感なく受け入れられている事例が確認された。本研究は、発話末の言語形式の使用実態に加え、それに伴う発話意識との関連も総合的に分析し、異文化間コミュニケーションにおける相互理解の促進に知見を提示することを目指す。

P9) DO BICHNGOC(ドー ビッグック)：九州大学

初来日のベトナム人日本語学習者の聞き返し使用に影響を与える要因について

近年、聴解・発音に課題を抱えるベトナム人日本語学習者が増加し、技能実習生などの日本語母語話者との接触が限られる学習者は、会話に困難を感じている。このような状況に聞き返しは聴解問題を解決する手段として重要な方略と言えるが、ベトナム人を対象としたもの、また日本語能力以外の要因が聞き返しに与える詳細な影響についての研究も殆どされていない。本研究では、初来日のベトナム人学習者 4 名の自然発話と半構造化インタビューのデータをもとに、第二言語社会化論の視点から聞き返し使用に影響を与える要因の解明を目的とする。その結果、学習環境、ピアプレッシャーなどの外的要因と、自己調整学習、学習意欲などの内的要因が明らかになった。この新たな知見は聞き返しの研究における理論的枠組みの拡張に繋がる可能性を示唆している。また、これは聞き返しを重視した指導法の必要性を支持するが、聞き返しを促す環境づくりも重要な要素となる。